



朝一小だより

学校教育目標

- ・考える子
- ・やさしい子
- ・たくましい子



活気があふれ、心が躍り、一人一人がより良く生きる学校

Tel048-461-0052 <http://www.asakadailshou.city-asaka.ed.jp/>

朝霞市立朝霞第一小学校

令和6年10月1日

児童数 586名



ワクワクするような世界に連れて行ってくれます

校長 金子 二郎

「暑さ寒さも彼岸まで」とはいうものの、今年の9月は半ばを過ぎても関東地方で猛暑日が記録され、熱中症への備えに気が抜けない日々が長く続きました。一方で、「ゲリラ豪雨」や「線状降水帯」といった10年前には使われなかった気象用語を毎日のように耳にするようになり、災害をもたらす想像を絶する被害も報道されています。それでも朝晩は過ごし易くなり、先日の中秋の名月もまた格別でした。



さて、「スポーツの秋」や「味覚の秋」に対し、以前に比べて印象が薄れつつある感が否めないのが「読書の秋」です。文化庁では読書の習慣について調べており、令和6年1月から3月にかけて全国の16歳以上の6000人に電子書籍も含めて1か月に読む本の数を調査したところ、1冊も「読まない」と答えた人の割合は62.6%にのぼりました。また、本を読んでいると答えた人を含め、読書量が「減っている」と答えた割合は69.1%にのぼり、こちらも過去最高となりました。日本人の「本離れ」は深刻になりつつあるようです。ところで、思想家でもある神戸女学院大学の内田樹名誉教授はその著書「だからあれほど言ったのに」(マガジンハウス新書)の中で読書について次のように述べています。

「読書の最大の教育的効果は、子どもたちを『外へ』連れ出すことにある。子どもたちはなかなか頑迷である。自分と同じ年齢や同じジェンダーや仲間たちの文化に深く繫縛されていて、その『檻』からなかなか出ることができない。この『居着き』を解除して、『檻』の外に出てゆくことが子どもの成熟にとっては必要である。でも、



『檻から無理やり引き出す』ことはできない。無理強いをすれば、どこかで子どもたちに傷を残すことになる。あくまで『檻』から出るのは子供たち自身の自由意思によるものでなければならない。読書はそれを可能にしてくれる。本を読むことを通じて、子どもたちは今の自分とはまったく違う人の中に入り込むことを愉悦として経験できるからである。遠い国の、違う時代の、年齢も、性別も、人種も、宗教も、生活文化もまったく違う人の中に入り込んでいって、その人の身体を通じて世界を経験すること、自我の呪縛、自分への居着きを解除する方法としてこれにまさるものはない。」先程とは別に全国学校図書館協議会が毎年行っている「学校読書調査」(2023年6月)では、小学生の平均は12.6冊で、10年前の2013年の10.1冊と比べると2冊以上増えているとのことで、ゲームに夢中になっているだけではなさそうです。「その本を読むと自分の原点に戻ることができる」という一冊をお持ちの方も多いのではないのでしょうか。本を通じてお子様と様々な思いを共有できれば、本当に素敵な時間を過ごせるに違いありません。



本をよく読むことで自分を成長させていください。本は著者がとても苦労して身に付けたことを、たやすく手に入れさせてくれるのだ。(ソクラテス)